

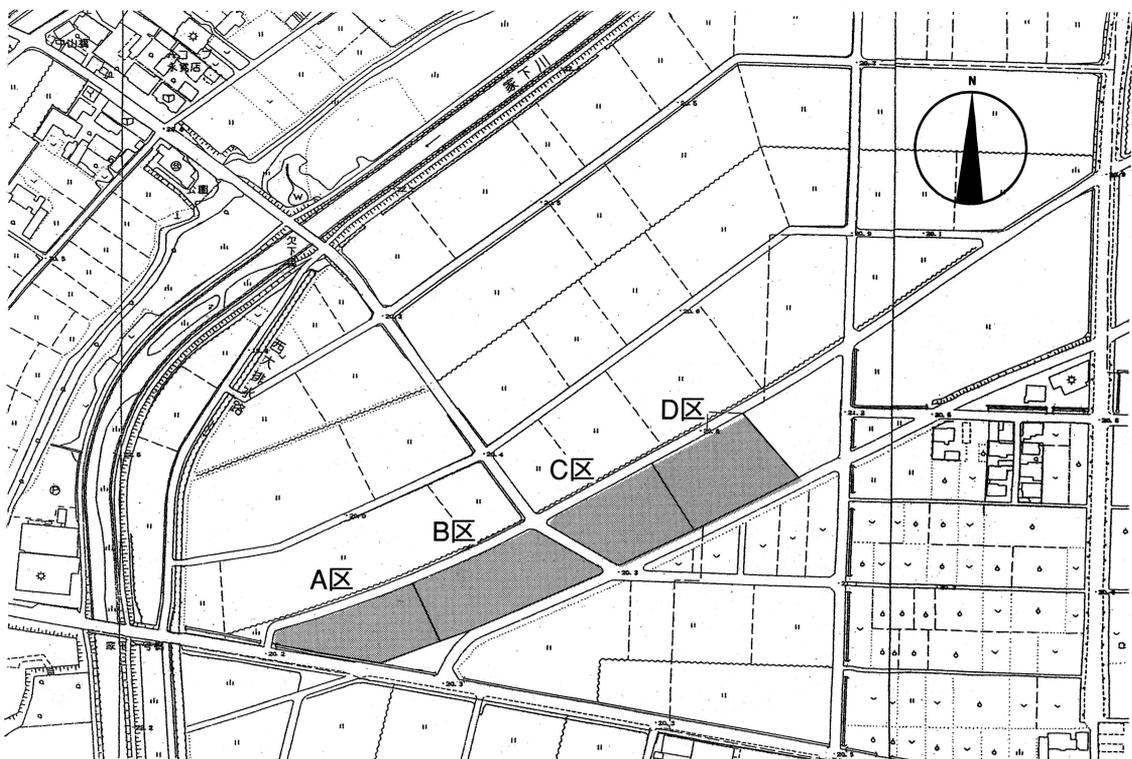
ほんがわ
本川遺跡

調査の経過 本川遺跡は豊田市南部、永覚町大正及び本川に所在し、矢作川中流域に形成された沖積地に立地する。この遺跡は平成7年度の県調査センター及び豊田市教育委員会による遺跡の有無確認調査により、古墳時代と戦国時代の遺跡の所在が明らかになった。その結果を受け、第二東海自動車道建設に伴う事前調査として日本道路公団より県教育委員会を通じ発掘調査を委託され、平成10年4月から調査を開始した。調査面積は15,500㎡で、A区からD区の4つの調査区を設定した。

調査の概要 今回の調査で新たに弥生時代の遺構を確認している。以下にB区からD区を中心に各時代を記述する。

中世～近世 中世の遺構は、溝・土坑などをB・C区で検出した。溝は、D区で検出した旧矢作川の可能性を持つ旧河道の西岸に並行し、真北より約20度東に振れて走るものと、屋敷地に相当する方形区画を構成するものがある。方形区画については確認できるものは4～5区画で、このうち規模のわかるものは1区画のみで、東西約30m、南北約50mを測る。近世の遺構は、溝・土坑などをC区東端からD区にかけて検出した。溝は、中世の溝とは方向が異なっており、ほぼ真北を向いて走る。その他の遺構としては、D区東端で旧矢作川の流路の一部と思われる河道を検出した。これらの遺構は18世紀中頃に頻発した矢作川の大洪水による多量の土砂によって埋没した可能性が高い。

(成瀬友弘)



第1図 調査区位置図 (1:5,000)

古墳時代 古墳時代中期の遺構はA区からB区にかけて展開している。B区の東端約4分の1とC区は谷状の地形で流木が多く、古墳時代の土師器も若干出土している。この谷より西側の、北西から南東にのびる幅の狭い標高約19mの微高地上で、複雑に重複した約70棟の竪穴住居、溝・土坑を確認した。竪穴住居の規模は一辺が3～7m程度の正方形ないしは長方形で、遺構検出面から床面までの深さは、浅いもので5cm程度、深いものになると40cm近くあり、なかには床面と思われる薄い炭化物層が3～4面認められるものもある。住居の主軸の方向はほぼ真北を向くもののほか、北東や北北西を向くものもあり、3～4回の建て替えがあったものと考えられる。

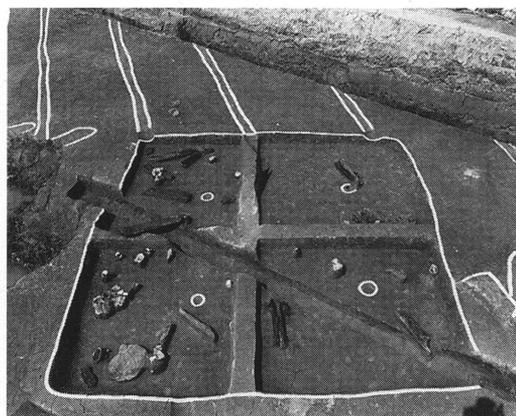
SB01は一辺約5mの焼失住居で、住居の上屋構造である柱や梁などの建築材が完全に燃えきらずに、いわゆる「生焼け」の状態が残っていた。焼失住居の検出例は全国的に多数みられるが、このように「生焼け」が残っていた例はきわめてまれで、今後、古墳時代の竪穴住居の構造を考えるうえで、貴重な資料となろう。

SB04とSB41ではカマドを検出した。うち、SB04のカマドは一辺約5.5mの竪穴住居の東壁やや南寄りにきわめて良好な状況で遺存していた。その平面形は住居の壁面からの長さが約14mで、最大幅が約1mの長細い台形状で、現況での高さは床面から約13cmあり、天井部まで残存していた。煙道部は内部に炭化物と焼土が詰まった状態で住居外までのびており、壁面から約25cm離れて直径約15cmの煙出部を検出した。燃焼部には支脚用の完形の高杯が伏せた状態で出土しており、その約10cm内側の焚口部では基盤の土が焼けて赤変していた。一方、住居のほぼ中央には地床炉と思われる焼土のひろがりを確認していることから、カマドと地床炉を併用していた可能性がある。出土した支脚用の高杯からこの住居の所属時期は5世紀の中葉頃とみられる。

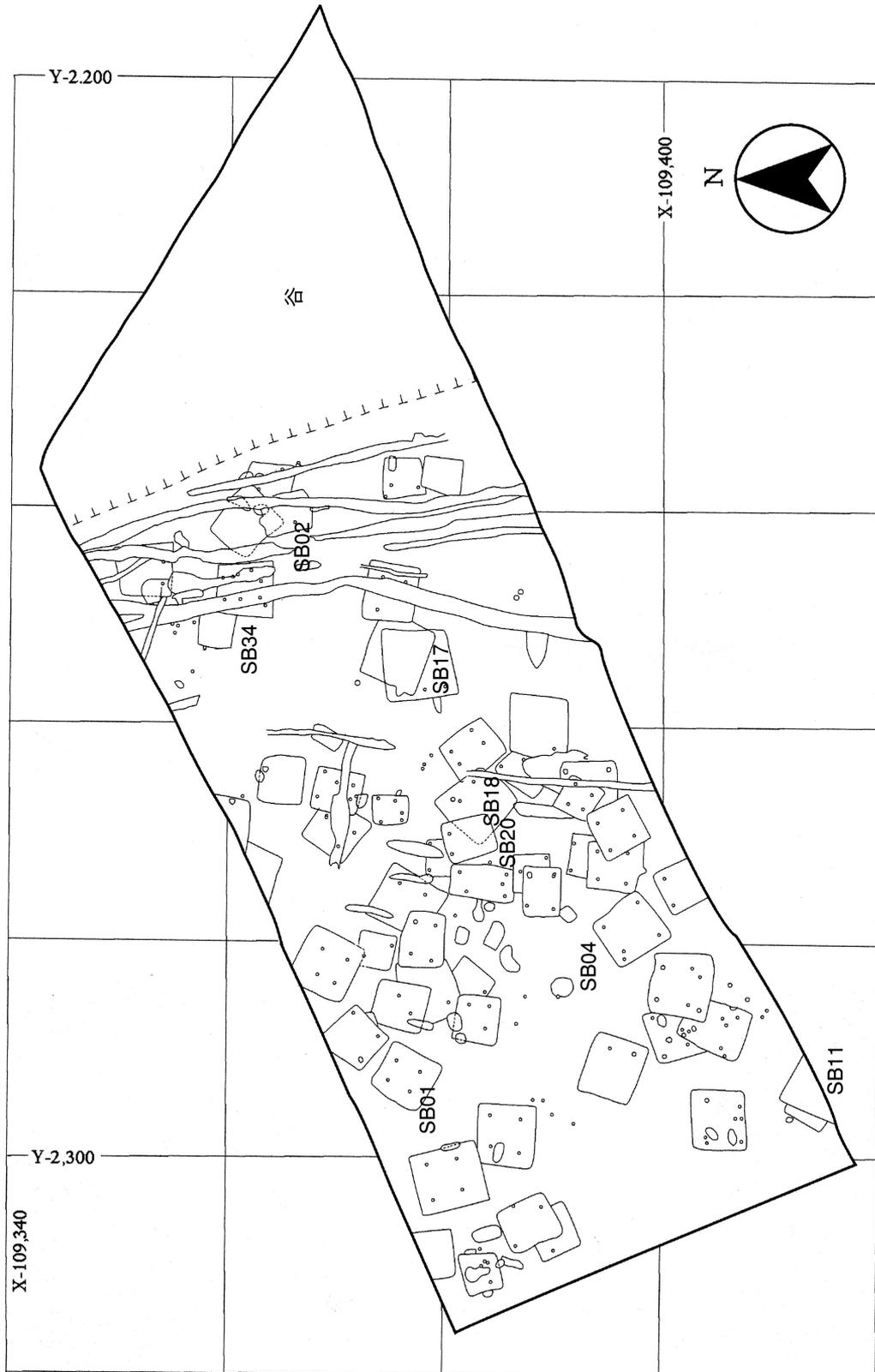
このほかには、SB02・11・17・18・20・34などから比較的まとまって土師器が出土している。時期はおおむね5世紀の前半から中葉に属する。 (樋上 昇)



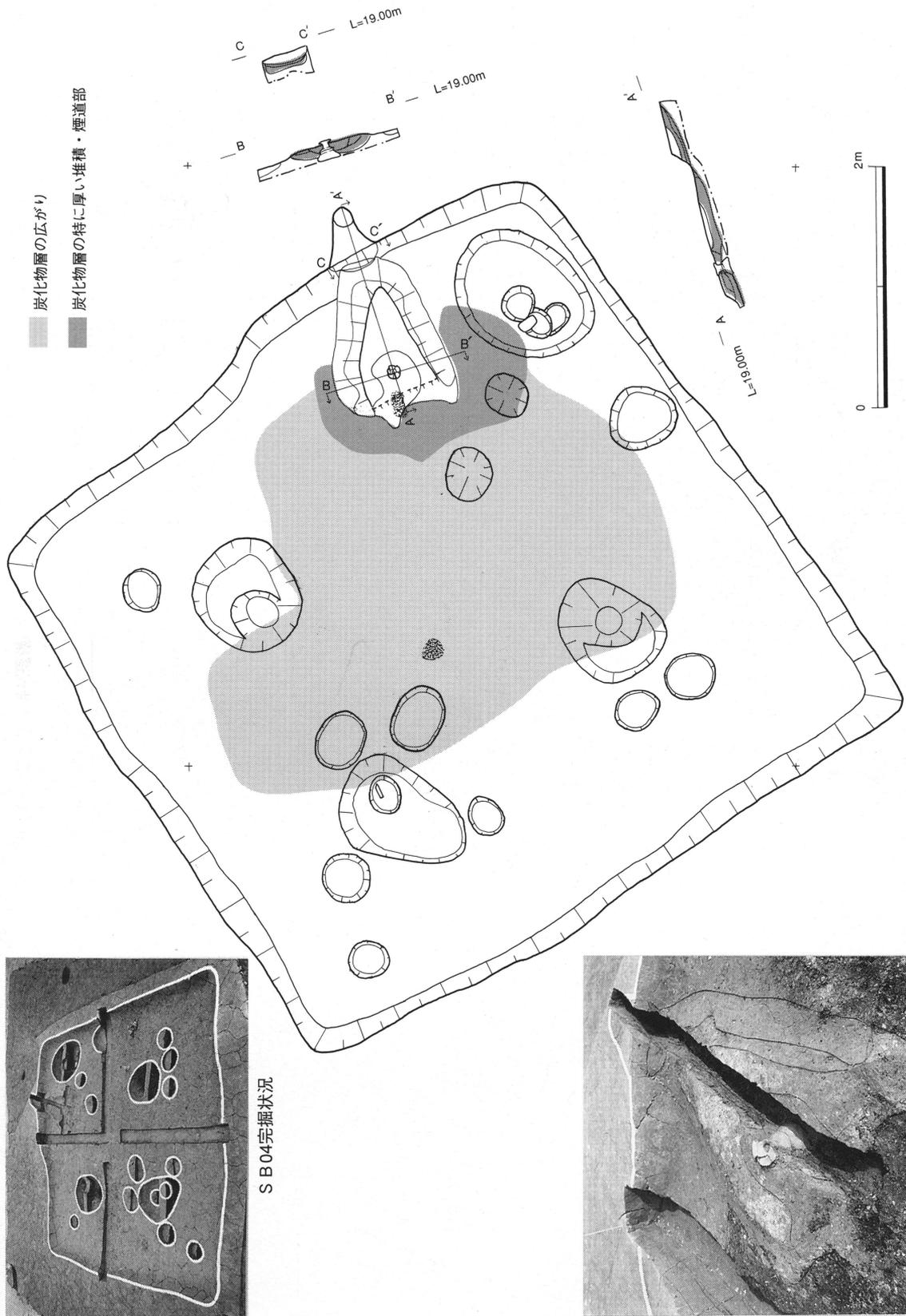
B区古墳時代全景



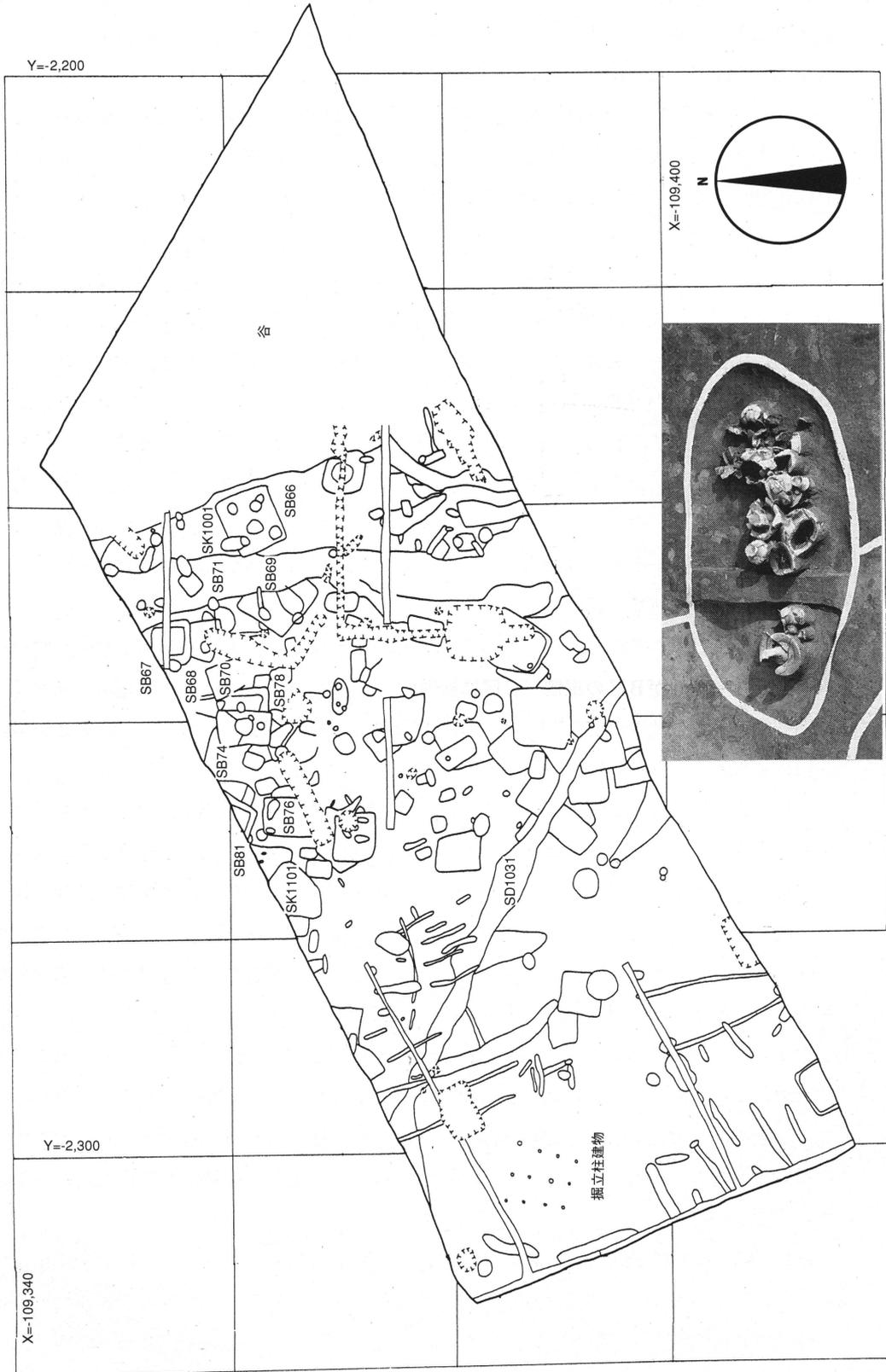
SB01 検出状況



第2図 B区古墳時代遺構図 (1:600)



第3図 SB04平面図およびカマド断面図 (1:50)



S K 1001遺物出土状況

第4図 B区弥生時代遺構図 (1:600)

弥生時代 弥生時代の遺構をB区東部分の谷状の地形より西側で検出した。前期の明確な遺構は確認することができなかったが、谷より西側のほぼ全域から条痕文土器片が出土している。中期の主な遺構としては、B区中央部分の微高地で竪穴住居（SB76・81）・土坑（SK1101）を検出した。SK1101は不定形をした大型土坑で、中から古井式の甕が東西に4点並んで出土した。そのうち両端2点は倒立しており、西側の甕の中から磨製石斧が出土した。後期の主な遺構としては、同じく微高地で竪穴住居（SB66～71・74・78）・土坑（SK1001）を検出した。SK1001は南北に長い楕円形をした土坑で、中から山中式併行期の壺4点・甕3点・高杯3点・器台1点がほぼ完形で出土し、この時期の良好な一括資料が得られた。谷の落ち際に近く、土坑の長軸の方向が谷の落ち際の方向と一致している。調査区を北西から南東方向にのびる溝（SD1031）から西側では竪穴住居はほとんど検出されず、中・後期の居住域は調査区中央北よりから北方へ広がるものと考えられる。他の遺構としては、B区北西部分で掘立柱建物群を検出した。そのうち規模がわかるものは、2×3間の総柱の建物1棟で、柱掘形は直径30cm前後を測り、5ヶ所から柱根を確認した。（宇佐見 守）

まとめ 今回の調査で戦国時代・古墳時代中期・弥生時代の遺構を良好な状態で確認した。以下に各時代の様相と今後の課題をまとめる。

戦国時代には、現集落がのる微高地と旧矢作川の流路の一部を挟み、西に対峙して溝に区画された屋敷地がB区の東側・C区に展開する。遺構の存続期間は16世紀前半と短く、周辺には鴛鴨城・上野城や三河一向一揆の拠点にもなった隣松寺があり、それらとの関連が注目される。

古墳時代中期の遺構はB区の微高地上に約70棟の竪穴住居を検出している。うち、カマドを有するものは2棟であるが、検出した全住居内の出土遺物中には須恵器はみられず、土師器のみである。遺構の遺存状態及び出土遺物から、この集落の存続期間は比較的短く5世紀前半から中葉であり、西三河地方のカマドの出現期を考えるのに良好な資料を得ている。また、近接して同時期の集落である神明遺跡・川原遺跡や三味線塚古墳・車塚古墳等があり、これらの遺跡との関係も考えなければならない。

弥生時代は前期とみられる遺物がB区西側を中心に散在するが、現時点では遺構の広がりには明確ではない。中・後期はB区の微高地上に竪穴住居が、やや標高の下がったその縁辺に土坑や溝が展開し、集落端の様相を示す。同じ沖積地に位置し近接する川原遺跡では中期には集落が営まれ、後期には方形周溝墓が築かれており、当遺跡との関連の検討を要する。

本川遺跡、また周辺の郷上遺跡・川原遺跡等の調査成果から、豊田市南部の矢作川流域の沖積地下に良好な状態で遺跡が遺存している例が明らかになった。今後、矢作川流域の沖積地での遺跡の分布・広がりが注目される。（佐藤公保）